

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会報」読者の皆様へお知らせ

2014年8月18日から連日13回にわたり、北海道新聞の夕刊紙面の、「私のなかの歴史」で、「ヒグマ研究45年」という題で、私(門崎允昭)が、私の「ヒグマについての考え、人と熊の共存策」等を口述、編集委員の「中尾 吉清」さんが取材文章化し、掲載されました。その第3回目、8月20日(木曜日)掲載をここに再録しますので、ぜひ、お読み下さい。

2014年(平成26年)8月20



クマがハクサンボ
ウフウなどの根を
掘った跡を観察す
る私

私のなかの 歴史

初めてヒグマを見たのは1955年、高校2年生の初夏です。山岳部の友人と2人で1週間かけて羊蹄山、ニセコ方面など道内の5山をめぐる登山旅行の最初、芦別岳での出来事でした。
開削されたばかりの新道ルートを登りました。ほかに登山者はいませんでしたね。途中の半面山を過ぎた熊ノ沼という水たまりの付近。30m向こうに何かいる！クマでした。体長1・3mそこらだったと思います。

動物学者

かどさき
門崎

まさあき
允昭さん

どうしたらいいか分からないけれど、「もし向かってきたら、腰のナタで立ち向かうぞ」——そう自分に言い聞かせているうちに、クマは姿を消しました。
友人と2人、しばらく立ちすくんでいました。「どうする?」「せっかく来たんだから行こうや」。

ヒグマ研究45年 ③

犬飼先生 師弟の交わり 20年以上

そんな会話をして、気を取り直し頂上に向かいました。

クマを本意に意識するようになったのはその後です。

大学山岳部では、日高山脈の稜線や沢をほぼ踏破しました。氷河期の名残でカール(圈谷)と呼ばれる地形があります。氷河に浸食された、浅いお

わん状のくぼみです。日高山脈には

22、23カ所あるとされ、すべてたどりましました。

日高の登山では、沢を詰めてカールを指すのが、一番楽なルートということが多く。カールには夏場も雪が残っていて、流れ出る水が得られ、宿営に適した平坦な地もあります。お花畑が広がり、ほっと安らげる別天地です。

そこは、ヒグマの天地でもあります。カールの残雪の上に、足跡やふん、近くの草むらにはハクサンボウフウ、チシマニンジンなどの根を掘り返して食べた跡があります。

身震いするような緊張感とともに、すこい獣が北海道にいらんだ

という感動を覚えました。

帯畜大大学院に進み、登山を続けながら家畜生理学を専攻し、鳥類の呼吸器を研究しました。教授は東大獣医学科出の淵名重海先生で、山岳部の顧問でした。鳥類は、気嚢という効率的で独特な呼吸器を持っています。だから潜水したり、高空を飛翔してヒマラヤ越えなどできるのですね。

私は、死んだ72種の鳥類を解剖し形態や、七面鳥を卵からふ化させて呼吸器の発生過程、さらに機能も研究しました。淵名先生は、この分野の大御所でしたが、71年に亡くなりました。

動物学者、犬飼哲夫先生(北大)

名誉教授との出会いは、先生が畜大に集中講義に来られた時でした。「毛皮動物学」という講義で、休憩時にお茶をお出しし、山の話もするといった縁からです。

犬飼先生はヒグマも研究されていました。研究分野は被害、および民族学的な見地からでした。

先生はヒグマに関する論文を17編執筆していますが、そのうち共著が10編。そのうち8編が私との共著です。87年には、北海道新聞社から「北海道の自然 ヒグマ」を共著で刊行しました。

犬飼先生との師弟の交わりは89年、91歳で亡くなるまで20年以上に及びました。先生には多くの教え子がいますが、ヒグマに関しては私が一番弟子。そう思っています。

(聞き手・中尾吉清)